

八重山考古学の研究 ～これまでの研究から課題まで～

1. はじめに

1) 八重山諸島の考古学編年(資料1; A3折込) ビジュアル版1巻2~3頁。都合により割愛

考古学編年とはどんなものだろうか

考古学では遺跡の年代を考える上で、いくつかの方法を使用する。考古資料には単独で年代の分かるものがとても少ないため、多くの資料を様々な角度から検討し、時間軸上に配列していく。その配列を編年と呼び、考古学研究においてはこの編年を考えることは、重要な作業である。一口に編年と言っても、個別の資料(土器や石器など)を並べ年代決定の基準を作る年代的編年と、「時代」といったような各時期の特徴をまとめ、文化期の区分を中心とした文化的編年と呼ばれるものなどがある。

最近では、科学年代測定の結果を編年に組み込むなど、相対年代(地層の上下や遺物の型式などから決められた先後関係を示す年代)と絶対年代(科学年代測定の結果や文献などによって示される年代)を組み合わせた編年が多く見られるようになってきている。

八重山諸島の考古学編年

八重山諸島の考古学編年について紹介する。八重山諸島の先史時代は縄文や弥生文化の影響は考えられていない。そのため、独自の考古学編年を利用している。

1972(昭和47)年の沖縄県本土復帰後、沖縄県教育委員会や石垣市教育委員会など行政機関により、多くの発掘調査が実施された。発掘調査例が増えてくることによって、八重山諸島の先史文化は、土器 無土器という全国でも珍しい変遷であることが確認されていく。

八重山諸島に関するもっとも古い編年は、1956年の多和田真淳によるものである。その後、1959年に早稲田大学八重山学術調査団の考古班による発掘調査が八重山諸島各地で実施され、その成果とともに、いわゆる「早稲田編年」が提唱された。早稲田編年は、八重山の文化を第一期~第四期に分け、第一期は先史時代の無土器文化、第二期は先史時代の有土器文化、第三期と第四期は歴史時代の遺跡としている。この早稲田編年は八重山考古学に影響を与え、その発表から20年余もの間、八重山諸島の考古学編年として定着していった。

しかし、早稲田編年も、発掘調査件数が増えるにつれて大きな転機を迎える。「下田原期よりも無土器期の方が古い」とした早稲田編年に逆転をもたらしたのは、1978年に行われた石垣島大田原遺跡と神田貝塚の発掘調査である。この発掘調査において、有土器の下田原期の文化層が無土器期の文化層よりも下位にあることが確認された。さらに、1983年~1985年に実施された波照間島下田原貝塚と大泊浜貝塚の発掘調査においても同様の逆転が確認され、無土器有土器という早稲田編年は、覆されることになった。その後、國分が仲間第一貝塚と仲間第二貝塚の層の堆積状況から、「仲間第一貝塚の形成は仲間第二貝塚の形成期より下降する時期であることは明瞭であろう。」と述べ、第一期と第二期の逆転を示唆したのをはじめ、安里嗣淳、金武正紀ほか、高宮廣衛、大濱永亘等が、この逆転を受けて独自の編年試案を行った。なお、編年研究の流れについては、『石垣市史考古ビジュアル版』『第1巻研究史』(石垣市2007)に詳しく紹介されている。

資料1にある「下田原期」等の表記は、金武正紀ほかの編年を基に、石垣市史考古ビジュアル版を編集する上で採用した時代区分である。

2. 研究史

1) 戦前の研究

八重山最初の遺物報告は、鹿児島県出身の植物学者田代安定によるものである。

田代の最初の八重山入りは、1882（明治15）年。その時には3日ほどの滞在だったそうだが、1885年、1887年にも八重山調査に訪れています。1885年に八重山入りした際、田代は1887年に「人類学上ノ取調ニ付キ沖繩ヨリノ通信」を『東京人類學會雑誌』で報告し、その後数回にわたって滞在の様子を寄稿している。その中のひとつ1889年の「琉球西表島古見村ノ土器」では茶碗や壺などを報告した。また、1890年の「沖繩県八重山列島見聞余録」の中では与那国島の大和墓について報告しており、直接考古学と関わるわけではないが、島の伝説などからすでに南方からの人種の渡来について述べている。

次に遺物について報告があるのは、1894年笹森儀助によるものである。著書『南嶋探験』では八重山行きに先立ち、首里で八重山役所長を務めた西常央に会い、西が採集した石器などの資料を見せてもらったことを記している。考古学に関係する記載は少ないが、黒島では島民が石斧を使って薪を割っていたと記載しており、明治期まで石器の使用があったことを示すこの文章は、旧村落で出土する石器を考える上でも興味深いものである。

この二人の報告は、遺物の紹介をしていますが、いわゆる「考古学的知見」での報告ではない。八重山から出土する遺物について、考古学的知見から報告したのは鳥居龍蔵が最初であった。鳥居と八重山との関わりは、西國男が持参した石斧を実見し、1894年に「琉球ニ於ケル石器時代ノ遺跡」を発表したことに始まる。また、同年、「琉球諸島女子現用ノはけだま及び同地方掘出ノ曲玉」では、西常央の採集品のうち曲玉を紹介している。しかし、これらは鳥居自ら得た資料ではない。鳥居が八重山の地に初めて足を踏み入れたのは、1904年のことである。

1904年、鳥居龍蔵は約2ヵ月の南島調査に入った。沖縄本島の調査を終え、八重山入りしたのは7月のこと。その時に獅子森の遺跡と四ヶ村の西端の遺跡の2ヵ所を発掘している。獅子森の遺跡は現在、獅子岡と仲間岡およびその周辺を含め、史跡川平貝塚として国指定を受けている（1972年5月15日指定）。四ヶ村の西端の遺跡とされた場所ははっきりしていないが、大瀧永亘は川花第三遺跡であろうと想定している。

獅子森の遺跡の調査では、土器、石器（石斧・石鎚・石杵・凹石）、貝器（貝皿）が出土したと報告されており、これらの遺物観察を踏まえて、「縄紋土器を残した者と、外耳土器（把手）を残した者とは全く民族を異にして居ると考えるのである」と結論づけている。

また、鳥居の重要な指摘のひとつには、「・・・この石器時代遺跡は本邦のものと更に関係なけれども、今後研究すべきは、台湾の石器時代の遺跡なりと云うべし。未だ軽々に断言なし能はされども、八重山の其れと、台湾の其れとは、今後に比較すべき、一大宿題ならん。」というものがある。

八重山諸島の考古学が沖縄本島以北、日本本土と違うという見解は、この時すでに述べられていた。また、鳥居は出土した把手の付いた土器について、一種独特な物と扱い、「外耳（ソトミミ）土器」という名称を与えました。「外耳土器」という言葉は、現在でも「そとみみどき」「がいじどき」というように、八重山考古学の用語として定着している。

その後、鳥居は八重山諸島出土の土器を弥生文化に属する物という見解を発表しますが、晩年には、『ある老学徒の手記』（鳥居1953）という本の中で、改めて八重山と台湾との関係を示唆している。

2) 戦後の研究 研究者による研究・発掘

戦後の八重山考古学は、多和田真淳の研究によってスタートする。ここでは、研究者による八重山研究の成果を時系列で紹介する。

1956年に多和田が発表した「琉球列島の貝塚分布とその概念」が八重山諸島最初の考古学編年である。その中で多和田は、奄美諸島から先島諸島まで、併せて100を超える遺跡を報告している。第二次世界大戦前後の混乱期に、これだけの遺跡の情報がまとめられたことは、沖縄考古学の大きな基礎となっている。

多和田は表面採集による遺跡分布調査が主であったが、戦後最初の本格的な発掘調査は、1954年に行われた波照間島下田原貝塚の発掘である。発掘調査は金関丈夫を団長として、國分直一、永井昌文、

多和田真淳と、戦後の沖縄考古学を引っ張っていく、そうそうたるメンバーが揃っていた。この発掘調査の成果は、発掘から10年後の1964年に報告された。この発掘調査によって、土器や石器などが出土し、報告されている。報告書が刊行されたのは後で述べる早稲田大学八重山学術調査団の報告よりも後になっているため、報告には新しい成果も反映されている。特に、先史時代の有土器文化の遺跡と無土器文化の遺跡との関係については、「(西表島の仲間第一貝塚が)八重山先史に於いて比を見ない程の貝の量をもつ規模の大きい貝塚であるにかかわらず、土器が見られないとされることから考えるなら、土器出現以前の遺跡と見てよいかも知れない」と、無土器 有土器(下田原式土器の時代)との流れを示唆している。なお、この下田原貝塚調査の概要は柳田国男の計らいにより、金関・國分両氏によってスライドなどを使いながら、直接、昭和天皇に伝えられたというエピソードが残っている。

1958年、高宮廣衛はクレメント・W・ミーヤンと共に、実施した鳩間島中森貝塚の調査も、八重山考古学にとっては重要な成果である。考古学では発掘調査のほか、出土した遺物を分類・整理することも重要な作業である。この遺跡の調査報告書(「八重山鳩間島中森貝塚発掘概報」;1959年)において、八重山諸島の土器が本格的に分類され、1978年に中森式土器が型式設定されている。同遺跡からは土器や陶磁器、鉄器、骨製品など多くの遺物が出土しており、出土した陶磁器などから、この遺跡は15世紀~16世紀頃の遺跡であることが分かっている。また、この調査は、八重山諸島で沖縄出身者が中心となって実施した初めての発掘調査でもある。

1959年、八重山考古学に大きな影響を与える調査が行われた。早稲田大学八重山学術調査団による調査である。発掘された遺跡は、石垣島山原貝塚、西表島仲間第一貝塚・仲間第二貝塚、西表平西島平西貝塚、波照間島下田原貝塚で、黒島では踏査と表面採集を行っている。調査報告は、翌1960年に『沖縄八重山』の中で「八重山の考古学」として報告された。その中で提唱されたのが、その後の八重山考古学に大きな影響を与える、いわゆる「早稲田編年」(資料2)と呼ばれるものである。滝口宏が提唱したこの編年では、無土器文化の仲間第一貝塚を第一期に、有土器文化の仲間第二貝塚を第二期に位置づけ、さらに、外耳土器の出土する山原貝塚や平西貝塚を第三期、パナリ焼が出土する遺跡を第四期に位置づけられた。先にも述べたとおり、八重山考古学に大きな影響を与えた無土器 土器という先史時代の流れを説いた編年である。

琉球列島の文化史研究の目的で来沖したりチャード・ピアソンは、1962年~1965年にかけて沖縄を調査した。1963年には西表島の船浦貝塚、波照間島のミシユク遺跡、アタノシ遺跡の3遺跡を試掘調査している。この時、無土器文化の遺跡である船浦貝塚の年代測定を実施している。炭化物を使った科学年代測定の結果は、1010±60AD(10世紀~11世紀)。これは、早稲田編年の第一期と同じ無土器文化が、これまで考えられてきたよりもずっと新しい可能性を示していた。ピアソンは1973年にも船浦貝塚の発掘調査を行っており、その際、無土器文化の包含層中から、鉄ノミ(鉄鍬の刃か?本人からのご教示による)や布片を検出している。無土器文化の遺跡からの鉄製品の出土は、実はピアソンの調査より先に、1955年に多和田真淳が発見・報告した仲間第一貝塚でも出土していた。さらに、1974年には、金武正紀が西表島仲間第一貝塚で中国唐時代の古銭「開元通宝」を採集。古銭の裏には「福」の字が鋳込まれており、これは、福建省の福州で会昌5(845)年に作られたものであることが分かっている。発掘調査によって鉄製品や年代の分かる銭貨が出土したことで、無土器文化がそれほど古くない可能性が強まり、早稲田編年に揺らぎが見えだしてきた。

さて、発掘調査は考古学の研究が進むだけではなく、地方に大きな力を与えることもある。三上次男ら青山学院大学の調査団は、1976年から定期定期に八重山諸島で発掘調査を行った。1976年~1977

資料2 早稲田編年

編年	遺跡名	遺物
第一期	仲間第一(西表)	石器(磨製・半磨製)
第二期	下田原(波照間) 仲間第二(西表) 大原川付近小貝塚(西表)	土器(少量)・石器 貝器・骨角器
第三期	山原(石垣) 平西(西表) フルロウ山(小浜) フルスト原(石垣) 波照間貝塚群	土器(外耳多量・磁器 その他) 鉄製品・石器・貝器・ 骨角器
第四期	大原(西表) 野底(西表) 川平第一(石垣) 川平第二(石垣) 川平第三(石垣) 名蔵川(石垣) 黒島	土器(ハナレ系?・磁器 その他)鉄製品

——線は各遺跡に共通する物

年には石垣島ヤマバレー遺跡の調査、1977年には西表島与那良遺跡発掘調査、1980年～1981年には西表内離島成屋遺跡の発掘調査、1982年～1984年には与那国島与那原遺跡の調査と、多くの発掘調査を行い報告している。また、1979年の大濱永亘を団長とする仲筋貝塚発掘調査への協力など、まだ復帰間もない頃の八重山の考古学にとって大きな励みとなったのである。

3) 戦後の研究 行政による発掘調査増える

研究者による発掘調査が、いわば研究を推進するためのものだとなれば、行政による発掘調査の多くは、開発等に伴う緊急発掘調査である。沖縄県が本土復帰を迎えると、これまでの学術目的の調査団による調査とは異なり、復帰前後の大規模な開発に伴い、各地で発掘調査が実施されるようになってきた。八重山諸島最初の行政発掘は、1975年沖縄県教育委員会による石垣島平得仲本御嶽遺跡の発掘調査である。続いて、船越貝塚やカンドウ原遺跡、フルスト原遺跡などの発掘調査が実施された。また、各島における遺跡分布の把握作業も進められ、1979年に発刊された『石垣島の遺跡』では、石垣島の中だけで89カ所、昭和54年度～昭和55年度に実施された遺跡分布調査を元に1980年に発刊された『竹富町・与那国町の遺跡』では、竹富町・与那国町併せて113カ所と、八重山諸島で200カ所余の遺跡が報告された。

沖縄県教育委員会や市町村教育委員会による行政発掘調査は、これまで謎の多かった八重山諸島の考古学に多くの資料を提供した。1978年に沖縄県教育委員会は石垣島の県道改良工事に伴う発掘調査を実施している。その時、調査対象となったのが有土器文化の大田原遺跡と無土器文化の神田貝塚である。丘陵上の大田原遺跡と丘陵下の砂地に形成された神田貝塚の層が重なり合う場所で、大田原遺跡の層が神田貝塚の層よりも下にあることが確認されたのである。それは、早稲田編年の第一期と第二期が層序で確認された瞬間であった。1980年に発刊された発掘調査報告書では、科学年代測定の結果が報告されている。その結果を見ると、大田原遺跡は3500年以上前（ $3870 \pm 65\text{yBP}$ ）、神田貝塚は9世紀～12世紀頃（ $940 \pm 65\text{yBP}$ 、 $1270 \pm 80\text{yBP}$ ）と、科学年代測定値でも有土器文化と無土器文化の逆転が明かとなった（資料3）。

資料3 地層壘重の法則

地層壘重の法則（ちそうるいじゅうのほうそく）

大田原遺跡と神田貝塚、下田原貝塚と大泊浜貝塚の先後関係を証明した地層の堆積とはいったいどのようなものなのでしょうか。

地層はいきなりではなく、だんだんと積もっていきます。すると、積み木や本を積み上げるように、先に置いた物は下になり、新しい物が上になります。「堆積してからしゅう曲したり、逆転したりして乱されたことのない堆積層では、どんな場合でも、いちばん若い地層はいちばん上にあり、いちばん古い地層は基底層にある。」という考えを、地質学では“地層壘重の法則”と言います。つまり、この考えに基づけば、堆積が下になっている大田原遺跡や下田原貝塚のほうが古いということが言えるのです。

さらに、発掘調査後に行った炭化物を使った科学年代測定の結果でも、逆転が裏付けられました。このように、発掘調査の成果やその後の科学的な検証からも、無土器期よりも土器のある下田原期のほうが古いことが確認されたのです。



同様の逆転は、1983年～1985年に波照間島で実施された有土器文化の下田原貝塚と無土器文化の大泊浜貝塚の調査でも確認されている。下田原貝塚と大泊浜貝塚の調査では、大泊浜貝塚の遺物包含層から、11世紀～12世紀前半と考えられる中国産の白磁玉縁碗や白磁端反碗、長崎産の滑石製石鍋、徳之島産カムイヤキ壺、鉄ノミなどが見つかるとともに、無土器文化が12世紀前半まで続くことも確認された。これらの調査により1960年の発表以降、大きな影響を与えてきた早稲田編年の逆転が確定したのである。

では、この特異な先史文化は八重山諸島だけのものなのか、という疑問が生まれる。八重山諸島の先史遺跡調査に関する研究史からはずいぶん遅れて、沖縄県教育委員会による宮古島長間底遺跡の発掘調査により、宮古島で初めて無土器文化の遺跡が発見された。1983年のことである。長間底遺跡ではシャコガイ製貝斧の他に、石垣島産の石（トムル層の石）で作られた石斧も発見されている。石器石材の流通問題を含め、この無土器期の文化圏が先島全域に広がるという事実は、先島考古学にとって新たな問題を提起した。そして、それをきっかけに無土器文化の研究が進んでいくことになる。

1985年に石垣市教育委員会によって発掘された無土器期の石垣島崎枝赤崎貝塚では、中国唐時代（626年～907年）の古銭、開元通宝が33枚も見つかった。このように、しっかりと年代が分かる遺物が無土器期の遺跡の遺物包含層中で出土したことは、科学年代測定値とも矛盾しておらず、無土器文化自体がそれほど古くないことを証明した。先に金武正紀によって報告された仲間第一貝塚の開元通宝の存在も、ここで改めて認められることになったのである。

また、1988年には沖縄県教育委員会により宮古島浦底遺跡の発掘調査が行われた。その結果、大量のシャコガイ製貝斧が出土し、宮古諸島における無土器遺跡の存在を再確認している。

早稲田編年の逆転を確認し、さらに宮古諸島でも八重山諸島と同じ先史無土器文化が確認されたことで、先島諸島の先史時代の様相が分かり始めてきた。1992年、宮古諸島多良間島において遺跡分布調査によって初めて先史時代の遺跡 多良間添道遺跡が発見されている。その後、1993年～1995年まで実施された発掘調査では、宮古諸島で初めて下田原式土器が出土した。これにより、下田原式土器は南は波照間島、北は多良間島までの範囲に広がっていることが分かっている。

この下田原期や無土器期といった先史時代の文化は、先にも述べたように宮古諸島・八重山諸島では発見されているが、沖縄諸島では発見されておらず、先島諸島では異なる文化圏が存在していた。現在、沖縄の先史時代は、奄美諸島と沖縄諸島を含む北琉球文化圏と先島諸島の南琉球文化圏とに分けられ、両圏の接触はほとんどなかったと考えられている。

発掘調査の事例が増えれば増えるほど情報も比例して増える為、考古学研究に終わり来ない。1995年に実施された石垣島ピウツタ遺跡の調査では、層と層から土器が出土し、層ではこれまでも確認されていた土器の文様が、その下の層からはこれまでとは違う土器の文様が確認された。下田原式土器文化の研究にまたひとつ、貴重な資料が加わったのである。

しかし、発掘調査によって何もかも順調に分かってきたのではない。

1983年に沖縄県教育委員会によって調査された与那国島トゥグル浜遺跡からは、土器が出土していない。一見、無土器文化かと考えられる様相だが、出土した石器を見ていくと、その石器は下田原式土器と一緒に見つかるものと形態が似ていることが分かったのである。石器は古い様相なのにも関わらず、土器は見つからない。調査担当者であった安里嗣淳は2003年に「与那国トゥグル浜遺跡の編年的位置の再検討」を発表し、この問題について試案を重ねている。同論文中、沖縄県立埋蔵文化財センターが委託した貝を利用した科学年代測定値が報告されているが、その結果、3500年以上前（ $3770 \pm 40\text{yBP}$ 、 $3890 \pm 40\text{yBP}$ ）という下田原式土器文化の頃とほぼ同じ年代が示されている。少しずつ研究資料は増えていますが、トゥグル浜遺跡の位置づけはまだ揺れている状況である。

また、大きな問題として、下田原式土器文化はどこに源流があるのか、無土器文化はどこに源流があるのか、この2つの時期はつながるのか、それとも全く別の系統なのかなど、これからも研究を続けなければならない課題は山積みである。

発掘調査では歴（原）史時代の遺跡についても、重要なことが分かってきた。1981年～1982年に石垣市教育委員会によって実施された石垣島ピロースク遺跡の調査では、時期の異なる2つの文化期が確認されている。12世紀～13世紀の遺物包含層と14世紀～15世紀の遺物包含層である。12世紀～13世

紀の層(新里村期)ではピロースク式土器と型式設定された口縁部が「く」の字に折れ曲がる土器や、ピロースクタイプ白磁碗が発見され、もうひとつの文化層(中森期)の調査では、14世紀から石垣が登場することが確認されたのである。現在では、当たり前のように見られる屋敷囲の石垣は、数百年も前の14世紀から八重山諸島の文化としてあったことが遺跡の調査で分かっている。また、石垣のすぐ側では人骨も見つかった。

1986年～1987年に沖縄県教育委員会が調査した竹富島新里村遺跡の調査では、12世紀～13世紀の石垣のない新里村東遺跡と、14世紀～15世紀の石垣がある新里村西遺跡が確認された。新里村東遺跡の調査では、4つの外耳が付いた滑石製石鍋を模倣した土器(新里村式土器と型式設定)が発見され、無土器から歴(原)史時代に移る過程で出現する新たな土器文化の源流が北から入ってきた滑石製石鍋にあることが確認されている。これは、先に発見されたピロースク式土器とあわせて、中森式土器よりも古いタイプの土器であることが分かっている。

また、新里村西遺跡の調査では、石垣に囲まれた屋敷が通用門で結ばれ、道路のないという八重山特有の集落形態が確認された。屋敷内には複数の掘立柱建物が建っていた様子も見つかっており、この屋敷が通用門で結ばれた形態や複数の建物が建つ様子は、現在の竹富島でもそのなごりを見ることができる。現在の八重山諸島に残る文化は、この頃から素地ができてきたのかもしれない。

さらに、1991年～1993年まで沖縄県教育委員会によって竹富島カイジ村遺跡・カイジ浜貝塚の調査が行われた。カイジ村遺跡は新里村式土器、ピロースク式土器、中森式土器などが出土し、12世紀以降連続して存続する村跡であることが分かっている。また、カイジ浜貝塚は、竹富島で初めて見つかった無土器遺跡である。この調査では第3層と第4層が無土器文化、第2層がカイジ村跡の遺物包含層であり、無土器から土器登場までの移行期の遺跡であることが確認された。無土器の終わりから歴(原)史時代の土器登場までの様子が、これらの遺跡調査によってよりハッキリとしてきたのである。

その他、国指定史跡である石垣島フルスト原遺跡、近年街路改良工事に伴って続々と発見される石垣四ヶ村(新川・石垣・大川・登野城)の遺跡等からは、多くの中国産磁器が出土し、当時の生活の様子や村の様子が分かっている。

また、琉球王府時代の蔵元跡遺跡発掘調査、陶器や瓦窯跡といった生産遺跡調査、近世の村跡調査など、時代も幅広い発掘調査が段々と進められてきている。

様々な遺跡調査を通じた研究の流れを述べてきたが、次に、具体的な調査の内容について、各時期の特徴的な遺跡を取り上げながら紹介する。

3. 先史時代

約4200年前～約3000年前 : 下田原期

約2000年前～12世紀前半 : 無土器期

考古学編年上は上記2時期(約4200年前～12世紀前半)にあたる。

1) 下田原期

keyword

主な遺跡 : 下田原貝塚、大田原遺跡、ピウツタ遺跡、仲間第二貝塚、多良間添道遺跡

主な遺物 : 下田原式土器、石製品、貝製品

その他の特徴 : 遺跡は川の河口や湧水の近くにあり、海からほど近い赤土大地上、現砂丘の下層にある内陸よりの古砂丘上、真砂などの山砂が堆積した内陸部の古砂丘に立地。

現在までに確認されている八重山諸島の遺跡で、もっとも古い時期がこの下田原期である。時期的には本州の縄文後期から晩期にあたるが、この時期の遺跡から出土する下田原式土器は、縄文土器の影響を受けておらず、もっと南の地域の影響を受けていたと考えられている。

< 遺物 >

下田原期を代表する遺物に下田原式土器がある。これは、波照間島下田原貝塚出土の土器を標式

とし、厚手で胎土には石英や長石を含み、牛角状と表現される上向きの把手が付くことが特徴としてあげられる。また、無文が多い。しかし、近年、様々な文様を持つものや、把手がないコップ形や深鉢形の土器などの例も増え（資料4、5）、バリエーション豊かな土器であることが分かっている。

資料4 ピュウツタ遺跡出土の下田原式土器



土器の他には、石製品（石器や尖頭器、ノミ状の製品、磨石や敲石、石皿等）や貝製品（スイジガイの突起を使った刺突具やヤコウガイの蓋を利用した製品、貝製のビーズ等）、骨製品（骨針、ノミ状製品）、サメ歯を利用したペンダント又はナイフと考えられるもの等が出土している。自然から入手できる様々な材料を利用して、工夫を凝らした道具を作っていたことが分かる。

< 遺構 >

遺構としては、竪穴遺構や平地住居と考えられる遺構、石を並べた炉跡と考えられる遺構などが見つかっている。下田原貝塚では、建物のプランははっきりしないが、多くの柱穴が見つかり、その近くで炉跡が発見されている。また、周囲に傾斜する地形を利用した溝が見つかっていることから、簡易な土木工事により排水施設を伴っていた可能性も指摘されている。

< 動物遺体・植物遺体 >

この時期の遺跡からは、イネやムギ等、食物に関係しそうな植物遺体は検出されていないが、動物遺体は獣魚骨の他、多くの貝類が見つかっている。このことから、海や山の資源をうまく利用して生活していたことが分かる。また、波照間島や多良間島など、イノシシが生息していない島でも、食料残渣や道具としてイノシシの骨が出土しており、下田原期の人びとが海を自由に行き来して、生活していた様子がうかがえる。

資料5 下田原式土器の色々な文様

押文・乳頭文		火線文
鳥居文・渦文	丸形渦文	渦文線文
鳥居文b	丸形渦文b	渦文線文b
押文	魚形刺突文	文線刺突文
渦線文	線刺突文	渦文刺突文

2) 無土器期

keyword

主な遺跡 : 大泊浜貝塚、神田貝塚、ピューシタ川河口遺跡、仲間第一貝塚

主な遺物 : 石製品、貝製品（特に貝斧の出土）

その他の特徴 : 遺跡は海浜地に近い砂丘上に立地。ビーチロックの発達や、海水面の変動により、砂丘上の生活が容易になった為と考えられる。

この時期の遺跡はもっとも謎が多い。先述のとおり土器文化を持っていたものから、無土器文化へ移行するのである。この理由は、文化一元論、文化二（多）元論に分けられ、大きく次の4つの意見に分かれている。

- ）有土器 無土器 有土器の変遷を是認する説
- ）無土器時代は存在しないとする説
- ）土器を持つ文化と持たない文化が共存したとする説
- ）共存ではなく入れ替わるとする説

まだ、明確な答えは見つかっていないが、この時期の特徴とも言える土器を持たないという独特な文化形態や、南方との関係が強調される貝斧の出土等、課題の多い時期である。また、科学年代測定では、貝斧が多く出土する宮古諸島を中心とした遺跡や名蔵貝塚群のほうが、大泊浜貝塚や神田貝塚よりも古い年代が得られている。このことから、高宮廣衛は自らの編年で、貝斧文化（名蔵貝塚文化） 石器文化（仲間第一貝塚文化）という流れを試案している。

< 遺物 >

土器は見られないが、石製品（石斧、敲石、ナイフ状石器等）や貝製品（スジガイ製利器、ヤコウガイ製貝匙、イモガイ製ビーズ、貝斧等）、骨製品（ヘラ状製品）等が出土している。その他、無土器期の終わり頃には、九州辺りから持ち込まれたと思われる中国産白磁、徳之島産カムイヤキ、長崎産滑石製石鍋等が出土する。また、数は少ないが、大泊浜貝塚で褐釉陶器が2点出土している。

八重山諸島における鉄製品の加工・製造はずっと後になるが、製品としては鉄鑿と考えられる資料や船釘などが無土器期の遺跡から出土している。大泊浜貝塚を例に挙げれば、G 22グリッド第4層で鉄鑿と考えられる資料が出土しており、白磁玉縁碗、白磁端反碗、カムイヤキ、滑石製石鍋と供伴しているという。この供伴関係から無土器期が終わりを迎える頃の遺物であると考えられる。

ここではもっとも特徴的遺物と言える貝斧（資料6）について紹介する。先島諸島で貝斧と言えればシャコガイ製貝斧を指す。シャコガイ製貝斧は、シャコガイのちょうつがい部及び肋の部分を利用して作られたものである。下田原期には見られない。現在、貝斧の起源については、フィリピン起源説と先島自生説がある。フィリピン起源説はリチャード・ピアソンや國分直一らが、1960年代後半～1970年代初頭にその可能性を指摘したのを始め、安里嗣淳や大濱永巨、小野林太郎らがそれを支持している。先島自生説は1978年に新田重清がその可能性を指摘し、近年、高山純がその説を支持している。

資料6 宮古島長間底遺跡出土の貝斧



先島自生説の背景には、類似する資料がフィリピンで発見されていても、それが八重山諸島の無土器期よりも古い年代であったり、また、フィリピンと先島諸島との中間地点で未発見であったり（＝伝播の経路が追えない）、供伴する遺物が異なるという問題があったりという、個々の問題が先島で自生（自主発生）したと考えれば説明がつくという理由がある。

先述のように貝斧起源もまだ明確ではないが、宮古島市城辺で調査が進められているアラフ遺跡では、形態の異なる貝斧が出土している。この出土を受けて、発掘調査を指導する江上幹幸は積極的に貝斧研究に取り組んでいる。

未だ、未攪乱の包含層から貝斧が出土した例は少ないが、今後研究が進めば、その先後関係などから貝斧のルーツが分かる日が来るかも知れない。

なお、宮古諸島の遺跡からは、貝斧と一緒にトムル層の石で作られた石器が出土している。これらのことから先程の高宮の編年試案を考慮すれば、石材や食材（イノシシ等）を調達するため、彼らはいったん南下し、また宮古諸島へと戻ってそこで生活を続けた可能性も考えられる。

< 遺構 >

無土器期は砂丘上に立地していることから、破壊されやすく遺構の残りは悪い。その中でも、礫敷遺構、礫床住居跡、炉跡などが検出されている。

波照間島大泊浜貝塚では、礫を敷き詰めた住居跡が見ついている。また、炉跡は3つ検出されており、2つは礫敷炉跡、もう1つは砂面上の炉跡である。炉跡が屋内にあったのか屋外にあった

のかは分かっていないが、住居跡と隣接して炉跡が検出された例は、まだ少ない。

さて、炉跡の検出は当時の人びとの調理法などを考える上で重要である。土器を持たない人びとがどのような調理をしたのかと考えた場合、もっとも有力なのが、いわゆる焼石調理である。ストーンボイリングが代表的に思われているが、実はそれは調理法のひとつであり、遺構からはストーンボイリングの可能性は低いと思われる。

焼石調理について、野嶋洋子の分類を紹介する（資料7）。

資料7 焼石調理の考古学的相関

焼石調理法	考古学的相関
A. 地上式石蒸焼き（同一場所での石材加熱・調理）	礫集中部；礫加熱の痕跡・木炭；周辺に散在した焼礫（上部にも焼石を用いる場合）
B. 地上式石蒸焼き（別地点での石材加熱・調理）	礫集中部；周辺に散在する焼礫（上部にも焼石を用いる場合）
C. グリル	礫集中部；礫加熱の痕跡・木炭
D. 地下式石蒸焼き（同一土壌内での石材加熱・調理）	土壌；土壌内の加熱痕跡・木炭集中；土壌内焼礫；土壌周辺に散在する焼礫（上部にも焼石を用いる場合）
E. 地下式石蒸焼き（別地点での石材加熱・土壌内調理）	土壌；土壌内焼礫；土壌周辺に散在する焼礫（上部にも焼石を用いる場合）
F. 焼石包み込み調理	礫加熱のための焚火跡；散在する焼礫（礫数比較的少）
G. ストーンボイリング	礫加熱のための焚火跡；散在する焼礫（礫数比較的少）；容器としての土壌の可能性

この一覧では調理活動後、石を片付けない、つまり遺棄した状態にあることを前提としている。礫の抜き取りなどの人為的行為や自然の営為による保存状況の劣化等は、別に考慮する必要がある。

A 同様の準備工程を経るが、覆うことなく一面に展開した焼石上で調理を行うもの
加熱した礫を食物とともに包み込んで調理する方法

さて、ここで改めて、遺構として検出された大泊浜貝塚の3つの炉跡の例を見てみる。報告書の記載から、それぞれの炉跡は掘り込まれた様子が見られないことから、A～C、またはFのいずれかに該当すると思われる。また、いずれも上部には灰や木炭が含まれた黒色砂層などが堆積していた。これらのことから、AまたはCの可能性が出てくる。焼石は見つかっているが遺構が伴っていない遺跡は多い。今後、遺構の例が増えることで、調理法についても明かとなるだろう。

他の遺構としては、埋葬跡があり、大泊浜貝塚では3体の人骨が検出されている。いずれも第3層の中程から第4層上部を掘り込んであり、無土器期の後半もしくは新里村期の始めにあたると思われる。これらの遺構の特徴は、頭の向きが一定ではない、ということである。現在、四ヶ村の調査で発見される人骨は、ほとんど民俗方位の西側に頭が向いており、これは仏教との関わりがあると考えられる。その為、頭の向きが一定ではない、ということは、これらの宗教概念以前の可能性が高く、後述するピロースク遺跡出土の人骨との関係からも興味深いものである。

< 動物遺体・植物遺体 >

下田原期同様、この時期の遺跡からは、イネやムギ等、食物に関係しそうな植物遺体は検出されていないが、動物遺体は獣魚骨の他、多くの貝類が見つかっている。この時期も、各島々を自由に行き来して食料を調達していた様子がうかがえ、宮古諸島の遺跡からもイノシシの骨が出土している。これは先に紹介した石器石材の問題とも関係していると思われ、生活の場は宮古諸島に置きながら、海を渡り、食料や石材を得るために八重山諸島へ来ていた可能性がある。

4. 原史・歴史時代

12世紀～13世紀 : 新里村期（川平貝塚文化前期、スク時代前期）

13世紀末～17世紀初 : 中森期（晩期、第三期、川平貝塚文化前期、スク時代後期）

17世紀～19世紀 : パナリ期（晩期、第四期、川平貝塚文化後期）

考古学編年上は、上記3時期（12世紀～19世紀）にあたる。

1) 新里村期

keyword

- 主な遺跡 : 新里村東遺跡、ピロースク遺跡、カイジ村遺跡
主な遺物 : 新里村式土器（滑石製石鍋模倣土器）、ピロースク式土器、少量の中国陶磁器（北宋末～南宋）
その他の特徴 : 遺跡は丘陵上や平野に立地し、石垣がない集落を形成
炭化麦、炭化米が出土 少量の鉄製品

石垣島ピロースク遺跡や竹富島新里村東遺跡、カイジ村遺跡の発掘調査により、無土器期が終わり、また土器を作り始める過程が見えてきた重要な時期である。現在のところ把握されている遺跡は少ないが、石垣市教育委員会発行の『石垣島の岩陰遺跡 沖縄県石垣市内岩陰遺跡分布調査報告書』には土器の出土がない、もしくは中森式土器（歴《原》史時代の土器ということか？）が出土している遺跡が紹介されており、一部の遺跡については12世紀と把握しているようであるから（文化課から直接の教示による）、無土器期末から新里村期にかかる遺跡が増える可能性はある。しかし、先出報告書の記載から年代観が確認できなかったため、ここでは紹介にとどめる。今後、詳細な報告を待ちたい。

<遺物>

ピロースク遺跡の発掘調査は研究史でも紹介したように1982年に実施され、その際に、複数の遺物包含層が確認された。うち、新里村期にあたるのは第 層と第 層である。先述のピロースク遺跡の調査でも、中森式土器とは異なる口縁形態を持つ土器が出土しており、後に、金武正紀によってピロースク式土器が型式設定された（資料8）。口縁部が「く」の字に折れ曲がり、胴部は膨らむものと真っ直ぐ底部につながるものが確認されている。その後、1986年～88年に沖縄県教育委員会が実施した新里村東遺跡の発掘調査では、長崎産滑石製石鍋の破片とともに、石鍋を模倣した新里村式土器（資料9）が出土し、八重山諸島における歴（原）史時代の土器の再登場は、滑石製石鍋に影響を受けたものだということが確認された。また、カイジ村遺跡では、新里村式土器、ピロースク式土器とともに、ピロースク式土器先行タイプと考えられる土器が検出されている。

資料8 ピロースク式土器



資料9 新里村式土器



この時期は遺跡の絶対数が少ないこともあるが、中森期に比して陶磁器出土量は少ない。しかし、白磁、褐釉陶器、カムイヤキなどが出土していることから、八重山諸島に入ってくるルートの問題も検討しなくてはならないだろう。この時期の遺跡から出土する中国産白磁について、早くから注目したのは調査を担当し、陶磁器について研究を進めていた金武正紀である。金武はピロースク遺跡出土の中国産白磁について、発掘調査報告書でピロースクタイプ碗、と報告し、後にさらに検討を加え発表した。

その他の出土遺物としては、貝製品（貝錘、貝刃、貝包丁、貝匙、垂飾品、遊具等）、骨製品（骨製利器、骨製尖頭器、骨製装飾品、ヘラ状製品）、石器（石斧、敲打具、石皿、砥石）等が出土している。なお、貝斧は無土器期の特徴的な遺物として把握されているが、新里村東遺跡から1点、カイジ村遺跡からも1点（埋土から未製品、もしくはハンマーと考えられるもの）出土している。

また、わずかではあるが鉄製品が出土している。新里村東遺跡からは、鉄鍋の破片が1点出土し、カイジ村遺跡からは、鉄釘1点（層）が出土している。その他の金属製品としては、中国唐時代の開元通宝をはじめ、おおよそ7世紀～11世紀頃に鑄造された銭貨がピロースク遺跡から出土している。

<遺構>

新里村期では、先述のように、屋敷囲の石垣は検出されていない。その他の遺構としては、新里

村東遺跡で土留めの石積みが確認されている。層序を確認すれば、C 22・D 25の西壁では、層が土留めの石積みの上に堆積していることから、整地して集落を築いたことが分かる。建物の形態としては、ピロースク遺跡で円形状平地住居跡が、新里村東遺跡、カイジ村遺跡等で方形の掘立柱建物跡が検出されている。

墓は、埋葬形態が確認できるのは、ピロースク遺跡の1基のみであり、新里村東遺跡出土の人骨は5体あるが、いずれも保存状態が悪く、報告書に遺構についての記載は見られない。

< 動物遺体・植物遺体 >

各遺跡の発掘調査により、イノーやマングローブといった比較的、採集が容易な場所に生息する貝類のほか、ブダイなどの魚類も多く出土する。また、イノシシも多く食していたようで、イノシシが生息しない島 竹富島、波照間島などでも出土する。新里村東遺跡ではウシの骨も出土しており、動物遺体は未整理の遺跡も多いが、この頃からウシの出土が増える可能性がある。

ピロースク遺跡では埋葬されたイヌの骨が出土しているが、同定した金子浩昌氏は、種は日本犬ではなく古い時期のものではない、との見解を示している。層上部からの出土ということで、ここで紹介した。近世文書の「慶来慶田城由来記」には、漂着したオランダ船を助けた際に譲り受けた雄・雌のイヌが最初のイヌであると記されている。製品ではあるが、先史時代の波照間島下田原貝塚ではイヌの牙に穿孔した垂飾品が出土しており、イヌの登場はもっと早くなる可能性もある。また、新里村東遺跡ではイエネコやニワトリも出土している。

ピロースク遺跡の発掘調査では、層から炭化麦と炭化米が出土している。報告書の所見によれば、米は1粒のみで断定できないが、麦作は盛行していたという可能性を指摘している。なお、宇田津徹朗の報告では、ピロースク遺跡出土の土器胎土からイネのプラント・オパールが検出されているが、分析したのが胴部資料で、ピロースク式土器かは判然としない。しかし、炭化米の出土と併せて考えると、稲作の開始期として検討できる。また、ピロースク遺跡等で出土する貝包丁は、穂摘具の可能性が指摘されている。

2) 中森期

keyword

- 主な遺跡 : 鳩間中森貝塚、山原貝塚、フルスト原遺跡、新里村西遺跡、花城(ハナック)村跡遺跡、石垣島四カ村周辺の遺跡等、多数
- 主な遺物 : 中森式土器、中国陶磁器が大量に出土(元~明)
- その他の特徴 : 遺跡は丘陵上や平野に立地し、石垣が登場
首里との関わり強く 人口の増加
この頃から稲作盛んに; 炭化米、イネのプラント・オパールが検出される

中森期は、先の新里村期に比べて、人口が圧倒的に増えたことが、増加する遺跡の傾向からも分かる。対外的な交流(交易活動)が増えた時期でもあり、この時期の各遺跡からは、多くの輸入陶磁器が出土する。また、屋敷囲いの石垣が登場するのもこの頃である。なお、よく15世紀の八重山を語る際に引用される「朝鮮王朝実録」の時代は、中森期である。

< 遺物 >

八重山諸島の歴(原)史時代の研究は、鳥居龍蔵の川平貝塚(川平獅子森の遺跡)の調査を嚆矢とする。鳥居は、沖縄本島や宮古を経由して八重山諸島に入り、石垣島で川平獅子森の遺跡を小発掘した。その時に出土した耳のついた土器について、いわゆる内耳土器に対して「外耳(ソトミミ)土器」と呼称し、台湾以南の南の地域との関係を示唆した。その後、弥生土器の系統であると訂正するが、『ある老学徒の手記』では、改めて「不可思議なることは、この土器の製作形式が、かの台湾東海岸花蓮港付近阿眉族(Ami)紅頭嶼ヤミ族(Yami)の現今製作土器と類似していることである。果して然らばこの遺跡は台湾島と連続すべきものである?、なお今後の研究を要す」と述べ、元の考えに回帰している。しかし、南方との関係を示唆した鳥居の主張は貴重なものであるが、こ

の「ソトミミドキ」は、先述の新里村遺跡の調査成果から、北からの文物である滑石製石鍋模倣から型式変化した土器だということが、現在では分かってきている（資料10）。

これらの土器の型式学的検討に青山学院大学の調査チームで参加した合田芳正が着手し、その後、新里貴之は新里村期から中森期にかけての土器型式の変化を八重山諸島だけではなく、宮古諸島まで含めてまとめた。八重山諸島の土器は、焼かれた環境によって混和材、胎土の違いにより多少差異はあるものの、これらの研究成果の範疇で把握できる。

資料10 中森式土器



また、外国産（主に中国）陶磁器については、沖縄本島や周辺諸地域とも比較検討しなければならないが、沖縄諸島のグスク時代の遺物とほぼ同様で、青磁は蓮弁紋碗や雷文帯碗、無紋の外反口縁碗などのほか、白磁、染付、褐釉陶器等が出土する。八重山諸島にこれだけの外国産磁器が入ってきた理由について明確な学説は未だない。しかし、遺跡から出土するのは事実であり、世界史的視野の中に、八重山諸島が存在する。

その他の遺物としては、刀子、手斧状鉄製品、鉄鍋破片等の鉄製品の出土数が新里村期に比して増え、西表島上村遺跡、石垣島ヤマバレー遺跡、仲筋貝塚等で簡易な鍛冶があったことを示す鞆の羽口なども出土している。「明実録」には、14世紀代に琉球が鉄釜等を欲している様子がうかがえ、大城慧は沖縄での鉄器流通について、グスク時代（12～16世紀）の後半以降に鉄器が広く使われだしたが、限定された特定階層にとどまり、一般民衆の中に浸透していくのはさらに遅れると想定している。また、農具の鉄器化が遅れるとの指摘は重要である。

鉄、石製品だけでなく、ウシやイノシシなど八重山諸島では比較的大型動物の骨を使った製品も見られる。骨製鋸様製品（骨製尖頭器・ヤス状製品・骨鋸等）やヘラ状製品等である。なお、近年、骨製鋸様製品を含む先島諸島出土の骨製品については、盛本勲、久貝弥嗣らによる集成・研究が進められている。

この時期からは石またはガラス製小玉や勾玉も出土する。貝製品では、貝錘、貝刃、ヤコウガイ製貝匙等が、また、わずかながら、敲打器等の石器も出土している。

< 遺構 >

ピロースク遺跡や新里村西遺跡の調査などから、14世紀に石垣が積み始められることが分かっている（資料11）。屋敷囲の石垣には、a：新里村西遺跡や花城村跡遺跡、フルスト原遺跡等に見られる“細胞壁状”と表現されるいくつかの屋敷跡が連なった形態のものや、b：小浜島ウテスク山遺跡のように中心となる空間を取り囲むように石垣で囲うもの、c：黒島の宮里部落北方遺跡群（イヌムル、フキスク、ザンドウ、ウブスク）などに見られるひとつひとつが独立したものの、等がある（a～cは本稿における暫定的な分類で

資料11 新里村西遺跡検出の石積



資料12に対応）。aは新里村西遺跡を発掘した金武正紀によって早くから八重山諸島の特徴的集落形態として指摘されたもので、石垣と石垣を結ぶ道路がなく、通用門で結ばれたタイプである。石垣の根石幅はフルスト原遺跡、新里村西遺跡、花城村跡遺跡等の調査により1.8m～2m幅で確認されており、その幅に比例するように花城村跡遺跡や波照間島マシユク村遺跡では2m以上の高さで石垣が現存している。

八重山諸島における石垣のある遺跡についても、以前は、沖縄本島及び周辺離島に見られるグスクの概念が当てはめられ、一様に考えられてきた時期がある。しかし、発掘調査が進むにつれ、出土する遺物や石垣の形態の差違が指摘され始めた。現在では集落論が優勢になっているが、眞嗣一は『小浜島総合調査報告書』の中でウテスク山遺跡、ユンドウレスクなどは城郭遺跡である

と位置づけている。

1997年に国立歴史民俗博物館と石垣市教育委員会が共催で開催した歴博フォーラムでは、「再発見 八重山の村」がテーマとなった。歴博の考古班代表であった小野正敏は、このシンポジウムに先立ち、八重山の中・近世の遺跡について歴博の研究者だけではなく沖縄県内の研究者も加えて、考古学・民俗学を中心とした視点で八重山各地で調査を実施した。なお、フルスト原遺跡、花城村跡遺跡に代表される道路がなくそれぞれが連結した石垣のある遺跡は、上村遺跡などの数例をのぞいて、おおむね14世紀末～16世紀の範囲で生活層が途絶える傾向が見られる。近年、山本正昭により、八重山諸島についてもスク・集落に関する論考が見られる。

住居に直接関する遺構としてはフルスト原遺跡で円形状平地住居跡が、ピロースク遺跡や新里村西遺跡等で方形の建物跡が検出されている。また、高床式の高倉跡と考えられるものも検出されており、農業生産の発達が指摘されている。金武正紀は新里村西遺跡の調査から、明治期に描かれた八重山の古地図（現沖縄県立図書館所蔵）や現在の竹富集落でも確認できる、ひとつの屋敷に複数の建物が建つのは、この時期からだと考察している。

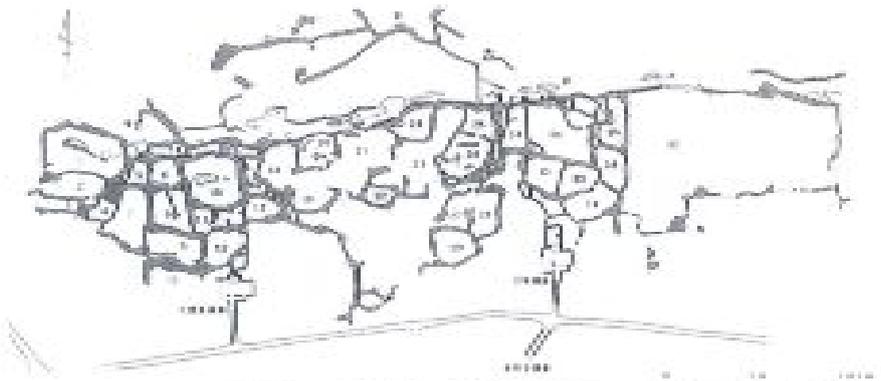
これらの集落遺構に隣接して、井戸も見られる。これらの井戸はウリカー（降り井戸）が多いが、近世以降も使われ続ける場合が多い。石垣島平得のパイナーカー（パイナーカー遺跡）やアラスク村跡遺跡内の新城原井戸、竹富島の新里村東・西遺跡の中心に位置するハナクンガー等も幅を広げ階段を設けたり、周囲に石を積んだりしながら、形を変えていったものと思われる。

墓制については、遺跡で確認されたのはすべて埋葬である。土壙墓や周囲を石で囲った石囲墓、板石墓等が見られる。石垣島四ヶ村では、成人骨は民俗方位の西側に頭を向けて埋葬される傾向がある。1例のみ石垣島石垣貝塚に石組墓（資料13）と報告されたものがあるが、墓の規模も他の例より大きく、かつ、焼骨を埋めており、スタンダードな墓とは言えない。今後、類例の報告を待つて検討すべき事例である。

他に円形の石組遺構や溝状遺構なども確認されている。

< 動物遺体・植物遺体 >

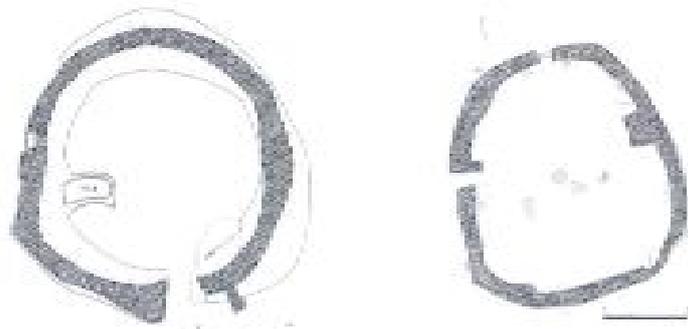
貝類ではチョウセンサザエやマガキガイ、シャコガイ等、魚類では新里村期同様ブダイやハタ類などが見られるが、比較的大型の動物骨（イノシシ、ウシ）が多く見られるようになる。また、例



石垣遺構 a：花城村跡遺跡平面図



石垣遺構 b：ウテイスク山遺跡平面図



石垣遺構 c：フカスク遺跡（左）とアラスク遺跡（右）平面図

は少ないがウマやヤギも見られる。

飼育動物については、新里村期同様、ニワトリやウシが確認されている。慶来慶田城遺跡からのイエネコの出土について、同定を担当した金子浩昌は沖縄におけるネコの飼育はグスク期以降であり、日本本土とほぼ変わりないと報告している。しかし、イヌについてはビロースク遺跡で埋葬されたイヌの骨が出土したのとは対比的に、慶来慶田城遺跡では解体痕を持つイヌの骨が出土しており、金子は沖縄では基本的にイヌを食べる風習はなかったはず、としてイヌを食べる風習を持つ別の文化との接触を示唆している。



中森期は米や粟の栽培が安定化してくる時期であろう。フルスト原遺跡、新里村西遺跡を始め、複数の遺跡で炭化米やイネプラント・オパール（注）の報告があり、稲作がかなり定着していることがうかがえる。分析の結果、それらはジャポニカ種であることが指摘されている。これは、新里村西遺跡で検出された高倉跡や、遺跡が増える（人口が増加する）要因としても重要である。

3) パナリ期

keyword

- 主な遺跡 : 野底遺跡、網取遺跡、八重山蔵元跡、黒石川窯跡、名蔵瓦窯跡、八重山諸島の近世村跡、現集落、新城島
- 主な遺物 : パナリ焼、湧田・壺屋などの県産陶器、八重山産の陶器
- その他の特徴 : 移住等による集落移動、現村落の基礎、明和津波

パナリ期の集落遺跡に関する発掘調査事例は少ない。しかし、八重山諸島には今なお、近世の村跡の石垣が残り、その面影を残している。廃村になった近世集落のほとんどは、現在、雑木に覆われて進入が困難な状態にある。さらに、開発の対象となっていなかったため、復帰前後からの行政による緊急発掘の対象とならなかったことも原因としてあげられる。その中で、重要な遺跡の調査は、西表島上村遺跡の発掘調査である。中森期のフルスト原遺跡や花城村跡遺跡などが、おおよそ16世紀の前半までの遺跡であるのに対し、上村遺跡はその範囲内で時間差が確認されているものの、中森期とパナリ期の層が確認されており、その結果、パナリ焼の初現が17世紀であることを確認している。

近年、石垣島では北部地区ではリゾート開発の計画があり、そのための範囲確認調査として野底遺跡が発掘調査されたのを始め、市街地周辺では、八重山支庁の移転に伴い、八重山蔵元跡の発掘調査が、また、1990年代に入ってから、先述の街路改良工事に伴い四ヵ村を走る通称2号線の街路改良工事に伴う緊急発掘調査が実施され、上層からはパナリ焼や近世陶磁器が出土している。さらに、黒石川窯跡や名蔵瓦窯跡といった生産遺跡の発掘調査も実施され、窯体の検出に成功している。また、学術調査としては、西表島網取遺跡（東海大学網取研究所敷地内）の調査を東海大学が実施し、詳細な食糧残滓の分析を始め、田、村に残る鍛冶屋跡の遺構検出などの実績も上げている。

< 遺物 >

八重山近世を代表する土器にパナリ焼がある（資料14）。古文書にも「新城焼」として登場する。現存してるものには壺や骨蔵器などがあるが、ほとんどが墓からの採集品である。なお、「八重山島諸座御規模帳」（琉球大学附属図書館宮良殿内文庫）に現れるパナリ焼の器種には、

火取、れんかく鉢、かめ、鍋、火爐、風呂がある。

パナリ焼は、一般的には新城島で焼かれたものと言われており、新城島には上地、下地ともに窯跡があったと伝えられている。しかし、パナリ焼の胎土分析の結果、新城島の痩せた土地ではなく、もっと有機物を含んだ耕作地の土を使った可能性が指摘されている。それについて筆者は、人頭税時代の八重山諸島において、パナリ焼を焼く技術が新城村の人びとの特権ではなかったか、という可能性を述べた。しかしながら、未だ、遺跡からの出土例は少なく、型式学的研究が進んでいないのが現状である。石垣島喜田盛遺跡では、器種・器形が把握できるパナリ焼資料が比較的多く出土しており、生活用品としてのパナリ焼研究が今後、進展するものと期待される。また、パナリ期になると、本土産陶磁器や沖縄県産陶器（八重山焼を含む）の出土が生活層や墓からも確認できる。八重山焼については、阿利直治の論考がある。



ほかに、煙管や簀などが多く出土する。これらは生活層からの出土もあるが、墓の副葬品としても多く見られるようになる。

< 遺構 >

近世のパナリ期の屋敷囲の石垣は、中森期と比べ、民俗方位による東西というズレはあるものの、おおよそ東西南北を走る道路のある集落形態に変わっている。また、石垣の根石の幅や高さも現在、石垣島の白保や川平、竹富島、西表島祖納といった、集落の古い形態が残る地域と比しても、殆ど変わらない。

中森期とパナリ期、そして現集落は、基本的な空間の選択（立地）が類似する。そのため、同じ場所に人びとが住み続けた結果、恒常的な攪乱が続いている。明治期に廃村になった村跡でない限り、近世の未攪乱の遺物包含層を探することは困難である。先述のように、近年、石垣市内では街路改良工事に伴う緊急発掘が続いているが、そこでも、中森期では未攪乱の遺物包含層が確認できても、その上層のパナリ期の層は現道路のコーラル填圧や建築工事に伴う攪乱により、把握しづらい状況にある。さらに、パナリ期の層の把握を困難にしているのは、明和津波の影響もあると考えられる。直接、明和津波の痕跡と思われる層は確認されていないが、その後、琉球王府による計画移民が行われ、新しい集落作りが推進されたことは古文書史料からも確認できる。

近年実施された沖縄県立埋蔵文化財センターによる与那国島の近世村跡や墓の調査が実施されており、事例を増やしつつある。

八重山諸島では先述の明治期の古地図から、屋敷の配置のほか、村にある施設もうかがいしることができる。その中で、各村に必ずと言っていいほど「カヂヤ」の印がある。もちろん、各村にいわゆる職人の鍛冶屋がいても生計が成り立つとは到底考えられず、村の鍛冶場というほうが適当であろう。近世文書の「富川親方八重山島規模帳」にはそれを裏付けるかのように、

一、木細工・加治細工・畳細工・石細工・木地引細工之儀、村々頭高二応シ人数相定不申者第一船作事島用之支罷成候間、其了簡を以村々江右工柄之者見立相働せ候事

と記され、不便がないように巧みな者から選んで働かせるようにとし、また、「与世山親方八重山島規模帳」には、百姓が望んだ時に所遺蔵でヘラや鍬を調べて渡していたが、品質が悪いので千割鉄を所望する者に渡して自分で打ち調えさせるようにとある。

また、八重山諸島各地には、まだ、人骨が残されたままの近世墓が多く見られる。それらは集落から離れているために、その帰属する村が不明な場合も多い。しかし、近世文書に残る記録や目に見える田や畑の遺構から推察し、「田畑等の邪魔にならない場所」という視点から見た場合、集落近くの田や畑の縁辺部に多く分布している。副葬される遺物と属する村の記録をたどれば、近世墓の傾向が読み解けるだろう。なお、近世になると埋葬は減り、風葬が増える傾向にある。沖縄県立埋蔵文化財センターによる与那国島嘉田地区古墓群や東海大学による網取遺跡の古墓調査は、これまで主となる生活跡の付随的に調査がなされてきた古墓の実態が、考古学の視点から明らかとなり

つつある。

生産遺跡に関しては、黒石川窯跡や名蔵瓦窯跡で発掘調査が実施され、窯体が確認されている。ほかに、その他の窯跡や、猪垣、魚垣といった遺構の分布調査も進められている。

各村に必ず存在する御嶽の石垣などの遺構は、御嶽の土地がかつての集落だった傾向が比較的高いことや、「大波之時各村之成行書」といった文書の記録からも近世に構築されたものと思われる。

< 動物遺体・植物遺体 >

発掘調査により、分類報告された例は少ないが、おおよそ先行する時期と差はない。しかし、ヤコウガイやホラガイ、大型のシャコガイなどを屋敷の中に持ち込む傾向が見られ、廃村になった近世村跡を踏査すると発見できる。これは、諸々の近世文書が示すとおり、人頭税の代納物として認められていたからだろう。いわゆる貝つなぎの痕跡ではないか、と言われる、ヤコウガイの口に孔があいたものも、蔵元跡遺跡のほか、近世村跡内で確認できる。

炭化米やプラントオパールで確認するまでもなく、文書や様々な伝承などからも、この時期には稲や粟、麦、稗といった穀物が栽培されていたようである。

5. おわりに

八重山諸島の考古学的調査・研究は、鳥居龍蔵の川平貝塚（川平獅子森の遺跡）発掘調査から始まった。その後、戦前の発掘調査は途絶える。戦後になってからは、精力的に八重山諸島各地を歩いた多和田真淳により多くの遺跡が発見され、また、大学機関等、研究者による発掘調査が実施されていた。沖縄県教育委員会や石垣市、竹富町、与那国町といった行政機関の発掘調査も、多くの資料を提供した。これらの資料を基に、個々の遺物研究は少しずつ深度を増し、漠然としていた「八重山の考古学」が分かりつつあるが、十分とは言えない。

本稿で述べてきたように、八重山諸島の考古学、特に先史文化は沖縄本島以北とは異なっている。発掘調査が進むにつれ、出土遺物が増え、人工遺物や遺構に対する研究は進み、当時の生活を復元する作業が進められている。しかしながら、その文化がどこから来たか、というルーツについては未だ不明な点が多い。それは、元々遺跡数も少ないが、現在まで発掘調査がなされた遺跡が僅かであることや、遺跡の保存状態が悪い等の理由も影響している。

2008年、西表鹿川のウブドーカール付近で、新たな遺跡が発見された。鹿川ウブドー遺跡と命名されたこの遺跡では、現地踏査において、下田原式土器破片の他、石器、貝斧などが採集されている。遺物の状態から、下田原期～無土器期までの複合遺跡と考えられる。9月20日～23日までの日程で層序確認の為の緊急発掘が計画されている。実は、大田原遺跡・神田貝塚、下田原貝塚・大泊浜貝塚でも、それぞれ時期の異なる層が重なって発見されたのはごく一部である。今回、ウブドー遺跡においては遺物の採集地がすべて近接しており、完全に層が重なって出土する可能性がある。もし、良好な状態で有土器 無土器に至る層の様子が確認されれば、文化一元論、文化多（二）元論というルーツの問題にも何らかの影響があるのは必至である。謎がひとつずつ解明されることを望みたい。

八重山諸島の歴（原）史時代について、1500年のオヤケアカハチ事件を境に、八重山諸島が琉球王朝の政治的版図に入るといえるのは、よく言われることである。たしかに、蔵元の設置をはじめ、八重山諸島の人びとの生活にも影響を与えた出来事であるが、それでもなお、その後も独自の生活スタイル（集落形態）を保ち、中森式に代表される土器を焼き、使用していた。それは、この地にしか残されていない八重山諸島の、そして琉球全体の歴史である。近年、八重山諸島では新空港建設着工に伴い、大型リゾート開発等に関係した緊急発掘調査も実施されている。この機会に、ただ視覚的に風景が変わるという問題だけではなく、普段は目に付かない地中の埋蔵文化財についても目を向けて頂きたい。また、遺跡の調査をすることで八重山諸島の歴史が見えるということを知って頂き調査への理解を希望するとともに、研究の発展にご協力いただきたい。

また、本資料では各時期ともに多くの研究成果がある内容を略記した。今後、自ら研究を深めていく中で、個々の問題点を検討していきたい。

なお、紙面の都合上、引用文献は割愛した。